



おるか!! おるか!!

昔、高月のある家に、年老いたお婆さんが、一人さみしく暮らしていました。

ある日のこと、夕暮れが近くなる頃、一人の薬売り（富山の商人）が来て、薬の入れかえや、勘定などを済ませ、後は世間話を面白おかしくしているうちに、すでに夕闇が迫ってきました。薬売りの男はお婆さんにいました。

「もう大分暗くなってきました。今から町へ出て、宿屋を探すのも厄介なことだが、今夜一晚、ここに泊めて頂くわけには参りませんか。」

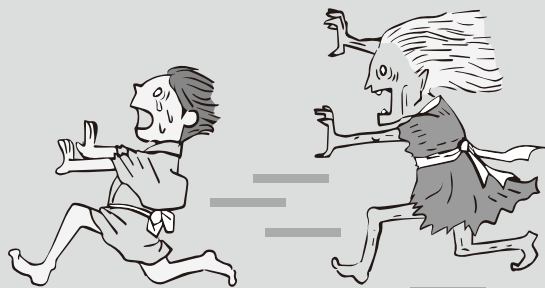
と、頼みました。お婆さんは、毎年来る薬売りで、よく知っていましたし、その上大変正直な男でしたので、心のやさしいお婆さんは、快よく頼みをきくことにしました。

「しかし、お見かけ通りの貧乏暮しでございます。何のおもてなしも出来ません。それでよかつたら、どうぞお泊りください。」といいました。そして、いよいよあたりが暗くなる頃、老婆は、この薬売りの男のために粗末ながらも、心のこもった夕食を用意し、夜具も整えてやりました。それが済むと、男に向かっていいました。「どうぞ、ゆつくりお休みになって下さいまし、私はこれから隣村の親せきに出かけますが、遅くなれば先方に泊ることになります。そこで一つお願いがございます。」と、いいながら、一寸考えていました。

「実は夜が更けて、真夜中頃になりますと、奥の部屋の方から、おるか? おるか? と弱々しく哀れな声がかきこえてまいります。その時は、何度でも、おるよ。おるよ。と繰り返し返事をしてください。いく度でも、くどく呼びかけましても、同じように、おるよ、おるよ。と、受け答えしてくださいまし。」と、頼みこんで、迎えに来た者と、連れ立って出かけていきました。

旅の商人は、旅の疲れもあって、食事を済ませると、早速床に入りましたが、やがてかすかな寢息をたてて眠ってしまいました。





龍雲寺墓地

安養寺墓地

大龍寺墓地

スポーツ
センター●高鍋町
役場高月
この辺り

黒谷交差点

塩田川

夜はだんだんと更けて、あたりはシーンと静まり返って、物音一つ聞こえませんが、そのうちに子の刻(夜中の十二時頃)になると、グツスリ眠っていた男の耳に、何か怪しい音が聞こえてきたのです。男は、「はっ」と思い、息をこらしていますと、老婆のいった通り、奥の部屋から、細い蚊の泣くような声で、「おるかー。おるかー」と、何者かの声が、聞えてくるではありませんか。男は、いいつけられた様に、「おるよー。おるよー。」と返事するのですが、どうしたことかいつまでたっても、止めません。既に同じことを、かれこれ数十回も繰り返しているのです。男は余りにもうるさく、眠ることもできませんので、後はもう知らんふりを構え、黙ってしまいました。ところが、奥座敷の方から、静かではありますが、衣を引きずるような気配がするのです。しかも、だんだんと近づいて来る様子です。一体何者なんだろう？男はもう気が気ではありませんが、目だけはそっと奥の方を見つめています。間もなく、ふすまが少しずつ開いて、その隙間から、顔を突き出した者がいます。男がよく見ると、さあ大変肝をつぶしてしまいました。それもそのはずで、手や足は骨と皮で、目はらんらんと光り、その上真白な髪の毛をふり乱し、今にも飛びつきそうな怪物です。その姿は、まるでこの世の者とは思われません。正に怪物そのものです。その怪物はなおも、ジリジリと男めがけて、這い寄ってくるのです。男はこの意外な怪物の出現に、どきもを抜かれ、口もきけず何もかもうちすて、玄関の方に逃げるのがやっとです。抜けそうな腰に、力を入れましたが、ガクガクする足がもつれて、思うようになりません。やつのことで外に出て、冷たい夜風に吹きまわられながら、逃げまわりますが、怪物は、どこまでもついてくるのです。そこで木戸口にあった、高い柿の木に飛びつき、よじのぼりました。上の方へ、上の方にと、一番高い枝に、つかまりました。しかし怪物も、やはり柿の木に、のぼってくるのです。そして、男と怪物との距離は、次第に近くなり、早くも怪物の手が、男の足首に届きそうになりました。男はもう、どうすることもできません。

しかし、男はもうこれまでと腰に差していた扇子を手にするなり、

怪物の頭めがけて、ハッシとばかりに、強く打ちおろしました。

ところが不思議なことに、この一打で、怪物の今までの勢いは、どこかに吹き飛んでしまったように、静かに両眼を閉じ、恐しい容ぼうは見えないうちに、おだやかで柔和な姿となって、徐々にうしろへ、退ぞきはじめたのです。その中に怪物の姿は、かき消すように見えなくなっていました。

男はしばらくの間、ただあ然としていましたが、ようやく我に帰ると、柿の木からおりてきました。そして、全身から流れ出る冷汗をふきながら門の外を見ますと、どうしたことが、沢山のお坊さん達が、自分のいる方へと近づいてくるのです。

男のそばまで来たお坊さん達は、口をそろえていいました。

「いや、いや、今夜子の刻に、この屋敷の上で、火霊が飛び上り、右往左往しているので、内部に何か異変が起きたのではないかと案じましたので、かけつけたのですが。」といいながら「何かあったのではありませんか。」と、尋ねました。男は「ホッ」と安心して、今夜の出来ごとを、ありのままに、つつみ隠さず、お坊さん達に話しました。この話を聞いて、品のよいお坊さんが、進み出て「お話の中で、怪物の頭に、打ちおろされた扇子を拝見出来ませんか？」

と申し出られましたので早速腰の扇子を抜いて、お渡ししました。お坊さんは、ていねいに扇子を、おしいただかれて、おもむろに扇子を開いてごらんになりました。その扇子の中には、「南無阿弥…」と書いてあったのです。

翌日、老婆が法事から帰って来て、語ったところによりますと、「この家は、代々仏教だったのですが、今年の春、おじいさんが亡くなった時は、廃藩後の寺院の取りこわしで、神教改めとなり、葬式も神式で行ったのです。それで、おじいさんの霊も浮かばれず、迷ってしまっ、家に居ついたものと思われます。」と、いうことでした。

当時この家の付近は、寺院が多く、この三か寺の外、日光院、高月院、宝福寺、西迎院、覚正寺などがありました。

(山名重勝筆録より)

※明治初年に、廃仏毀釈(はいぶつきしゃく)運動が全国的におき、高鍋の地でも多くの寺院や仏像が壊されました。

定期的に発行します
保存してね!



「たかなべ 伝・伝 Returns」の発行には、まいづるカード会のご協力を頂いています。